

## 序 明治期における「風景の発見」

西欧において、自然が有用性の観点のみから見られることを止め、「風景」として美的鑑賞の対象となったのは近世以降とされる。この「風景の発見」を説く言説は多いが<sup>1</sup>、それは往々にして近代的自我の自律と、風景の成立とをパラレルな現象と見る。すなわち近代の自由な自我が独立するにつれ客体としての自然も独立し<sup>2</sup>、しかも両者の乖離を埋める調和的な全体が美的閉域に確保される時、初めて風景が発見されるというのである。

この言説への疑義・批判はあるにせよ<sup>3</sup>、それは現在でも力を失っていない。我々にとって重要なのは、この「発見」の物語が、日本の近代化をめぐる文脈でもしばしば繰り返されることである。影響力の強い柄谷行人の一文を引こう。

「風景」が日本で見出されたのは明治二十年代〔1887-97〕である。……風景としての風景はそれ以前には存在しなかったのであり、そう考えるときにのみ、「風景の発見」がいかに重層的な意味をはらむかをみることができるのである。……風景とは一つの認識的な布置であ〔る〕……。<sup>4</sup>

この明治期における「風景の発見」が論じられる際つねに強調されるのは、明治27年(1894)出版の志賀重昂『日本風景論』(以下『風景論』と略)の重要性である。それが当時から認識されていたことは、出版直後の多くの書評からも推察できる<sup>5</sup>。さらに例えば、日本山岳文学の創始者、小島烏水はいう(1937)、『風景論』は、

当事にあつては最も目新しいものであつた。……例令今日の進んだ知識を土台として『日本風景論』から、多少の誤謬をさがして見たところで、〔志賀〕が我々当事の青年に与えた感化力を、秋毫も動揺させることは出来ない。……『風景論』が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された観がある。<sup>6</sup>

小島の評価には誇張もあろう。実際、『風景論』には先例や同時代の類例も見られる<sup>7</sup>。

また英語の著作からの無断借用も指摘されてきた<sup>8</sup>。しかしその影響力は否定すべくもない。『風景論』は明治期のベストセラーであった。明治 36 年 (1903) までに十五版を数え、以後も繰り返し再録されている。それは当時、福沢諭吉に次いで読まれた書物という。また周知の通り、『風景論』は日本登山史の画期をなす書物であった<sup>9</sup>。しかも『風景論』の影響の下、「日本風景論の系譜」とも称すべき一連の書物が書かれ続ける (後述)。『風景論』こそ、近代日本の「風景の発見」に貢献した最も顕著な事例といっても過言ではなかろう。

この影響力の強さは、『風景論』の強い国粹主義的性格による部分が多い。同書は日清戦争 (1894-95 ; 明治 27-28) の勃発にあわせて刊行され、恐らく志賀も国粹主義的バイアスが有利に働くことを十分意識していた<sup>10</sup>。とはいえ本稿は、『風景論』の国粹主義を批判するものではない。むしろ『風景論』の内容自体の真偽は差し当たり括弧に入れ、その文体構造に注目し、それが国粹主義を支える一要素だったことを示そうとする。勿論『風景論』には優れた先行研究が多数あり、文体への言及も多い<sup>11</sup>。しかしその文章構造自体と国粹主義との関係は、十分検討されてこなかったと思われる。

## 1 『風景論』の二面性 「科学と文学を調和する」

『風景論』自体が、本当に画期的な書物だったのか否かについては意見が分かれる。一方で、先の柄谷の影響を受けた論者達は、同書に決定的な認識論的転回点・断絶を見る<sup>12</sup>。他方、伝統的漢文学・日本文学への素養の深い研究者は、前近代 (江戸時代に遡る名所記・旅案内等) との連続性を強調する<sup>13</sup>。恐らく『風景論』はこの新旧の二面性を同時に備えていた、というのが最も真相に近いであろう。一方で『風景論』は、明らかに西欧近代科学に依拠し、日本全土を新しい地理学の知見から分類・分析する。志賀は『風景論』に先立ち『地理学講義』 (1889) を出版しており、それが『風景論』と連続することは指摘される通りである。地理学は福沢以降先例があったとはいえ、やはり新しい西欧風の学問として映ったに違いない。しかし他方、『風景論』で圧倒的なのは、古風な漢文調の文体、江戸時代までの日本文学や漢文学の多量かつ華麗な引用である (志賀は漢文をよくし、徳富蘇峰、東海散士と並び三大文章家と称された)。当時の書評もその種の文学性を褒めるものが多い。なるほど内村鑑三とともに札幌農学校に学んだ志賀は、英文学にも通じ、『風景論』でもラスキンなど時に英語原文のまま引用する<sup>14</sup>。しかし彼が、西洋文学の影響下で誕生した当時の新文学 (尾崎紅葉、幸田露伴等) に関心を寄せていた形跡はなく、『風景論』は

伝統的文学との強い連続性を示す。要するに『風景論』は、この新旧両面を併せ持っていた。再び小島の評言を借りれば、それは「科学と文学を調和する企て」であった<sup>15</sup>。

典型例を引こう。「山陰道、北陸道の水蒸気（夏）」と題された一節である。そこではまず科学的な事実が説明され、その後、唐突に俳句が引かれる。

山陰、北陸の各地、冬季中、亜細亜大陸よりの西北風は日本海を經、海の水蒸気を<sup>ら</sup>ひ上げて吹き到り、日本中央の大山系に撞撃し、此所に凝結するを以て、水蒸気多量に、氷雪四境を充塞す、しかも夏季はこれと全然相異り、太平洋岸（東海道等）は、インド洋上なる気候風に感化せられたために<sup>う</sup>湿潤多雨となるも、この感化を<sup>さ</sup>享くこと<sup>さ</sup>些少に、山陰道の初夏早く既に

郭公<sup>ほととぎす</sup>こえ晴ればれしいづも山 出雲山 寛之  
の象あり。(60) <sup>16</sup>

こうした地理学と文学、科学と芸術、新と旧との唐突な接合は、『風景論』の基本的ユニットとも呼ぶべきものであり、同書を通じて延々と繰り返される<sup>17</sup>。

この二面性は、同書が過渡期ないし分水嶺にある証左ともいえよう。また当時一般的な「地文学」というジャンルの特徴とも考えられる<sup>18</sup>。いずれにせよそれは『風景論』全体を貫き、例えばその挿絵にも看取できる。すなわちそこには、江戸時代を思わせる浮世絵的な挿絵（図 1・2 参照）と、新しい写實的・「科学的」洋風絵画（図 3・4 参照）の二系統の挿絵が用いられているのである（前者は雪湖樋畑、後者は海老名明四による）。

『風景論』の人気は、この二面性に負うところが少なくなかろう<sup>19</sup>。しかし結果として同書は、分裂した印象を与える。両者の接合は小島のいう「調和」より、米地文夫のいう「キマイラ」に近い<sup>20</sup>。この両面の〈無媒介的接合〉ともいうべきものは、『風景論』の顕著な文体的特徴をなすと思われる。以下その意味を考察しよう。

## 2 科学的枠組みによる風景美の再編制 均質平面への図式化

『風景論』における科学と文学の無媒介的接合は、なるほど唐突で恣意的な印象を与えるにせよ、そのユニットの反復を辿ると、一定の法則性が見て取れる。もう一つ典型例を抽出しよう。

けだし日本中央の大山系や、冬間水蒸気の多量に因り、氷雪満載、而して隆夏その一たび融消せしもの、今少しく寒冷なる温度に遭遇せば、更に凍氷<sup>とうひょう</sup>していはゆる「氷田<sup>グレシヤー</sup>」を化成せしや必然、ただ温度の少しく高きがために竟にこれに到らず、……既に隆夏針木嶺上二里四方の雪田を看、また嶺の谿間に「氷河」を看る、また以て「氷田」の看を倣して可。

これを要するに

あら世話し花見る中へ越の夏 不 鑿<sup>ふ せん</sup>  
の句、日本海岸における夏季の来状の全斑<sup>おん</sup>を蔽<sup>おほ</sup>ふ、十七字、正に百卷の地文学、万千の気象的材料に優<sup>まさ</sup>る。(62)

ここで文学（「十七字」）は、科学的事実（「百卷の地文学、万千の気象的材料」）の要約・精髓として、唐突に付加される。片や科学は、この芸術的表現の題材をもたらず枠組みを説明する（「日本中央の大山系」「水蒸気の多量に因り」「温度の少しく高きがため」等）。その結果、科学と芸術の間には、断絶が存在しつつも、あたかも因果論的な目的性の印象が生まれる。大まかにいえば『風景論』は、この科学から芸術への無媒介を孕む擬似＝因果論的目的性の、際限ない同型反復として概括できる。

このことは個々の風景記述のみならず、『風景論』全体の構成とも重なる。『風景論』の主要部は、付属的な部分を除けば次の四章から構成される（cf. 24）。「日本には気候、海流の多変多様なる事」、「日本には水蒸気の多量なる事」、「日本には火山岩の多々なる事」、「日本には流水の侵食激烈なる事」。つまり全体は科学の枠組みにより体系的に分類されるのだが、さらにこれらの章の末尾に、件の科学的事実が可能にする芸術的表現のリストが接合される。具体的には、第一の末尾に「日本の生物に関する品題」、第二の末尾に「日本の水蒸気に関する品題」、第三にはまとまった形ではないが、第四の末尾に総括的な「日本の文人、詩客、画師、彫刻家、風懐の高子に寄語す」が付く。最後の部分から引こう。

島帝国の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士にして、……絶代の大作、曠世の傑品を新創せんとするか、須<sup>すべか</sup>く日本国土絶特のものに寄托せんことを要す。……諸君子が満腔の心血を濺ぐに足るは、彼の水蒸気<sup>そくかざん</sup>にあり、活火山、熄火山、火山岩にあり、流水の激烈なる浸蝕にあり。(317)

従って結局『風景論』全体は、芸術を志向するといってもよい。そして科学は、その要約・精華としての芸術に、(一見) 確実な枠組みを擬似=因果論的に提供する。

目を引くのは、この科学的枠組みの図式性である。それは日本全土を幾何学的・中立的・網羅的にチャート化する。志賀は例えば日本海岸と太平洋岸を截然と二分し、両者の相違を単純な対照表により列挙する。「日本海岸は傾斜急劇なる所多く懸崖も多し。／太平洋岸は傾斜急劇なる所少く懸崖も少し。」等々である (24-29)。また彼は火山を重視するが、全国の火山を地域別に五分類し、さらにその四つを幾つかに下位区分し、各々の例を延々と列挙することで日本全土を一つの図式へと包摂する (98-173)。次のようにもいう。「日本の地形、幅狭く、丈け長く、蜿蜒として細く伸張し、面して峻崇たる山脈は、海岸線に平行して国の中央に連続す、……是を以てか若しそれ天魔を賃し来り、神斧を揮ひて日本国土の上より切割せしめんか、その横切面は鋭尖なる三角形を作さん」(265)。かくして列島全体が図式化ないしチャート化され、幾何学的・平面的タブローへと編制される。自らのアイデンティティを大きく改変・創成しつつあった当時の日本にとって、このような編制が、地図等の空間システム同様、斬新かつ適切と感じられたのは事実であろう<sup>21</sup>。

ただし繰り返せば、この科学的図式が支え志向する風景美の芸術的表現は、伝統的なものにすぎない。例えば、前述の小島の言葉に反し、志賀は江戸時代的な名所図会の類を否定しない(「名所図会なるもの……これ固より棄つべからず」[321-22])。実際、『風景論』には、古いタイプの名所旧跡に当たるものも多く登場する。従って『風景論』は、従来のものを含む日本の風景美を、新たな科学的擬似=因果論によって再編制し、基礎付け、図式化するというべきであろう。

それと呼応するように、『風景論』が記述する個々の風景も、多く均質な平面性を特徴とする。例えば、伝統的な名所といつてよい比叡山は次のように記述される。

京都市より田中、一乗寺を経……山の西麓に達す、また大津町より……日吉神社に詣る、社より登ること十町、花摘社あり、花摘社より延暦寺中堂まで二十町、中萱より八町、絶頂に達す、頂は「四明峰」と称す、京都の全市、加茂川の平原、梵琵琶湖の全体、「近江八景」、悉く眉端に集り、宛然一大パノラマ、ただ北方のみ比良岳に遮断せらる。(236)

こうした平面的・パノラマ的・絵画的な風景観は、『風景論』の随所に散見できる<sup>22</sup>。特徴

的なのは、比叡山に関してさえ宗教への言及が皆無なことである。寺や神社の名称は挙げられるが、それには単なる道標の役割しかない。

むしろ『風景論』は、全体の科学的傾向と相まって、反＝宗教的といえる性格をもつ<sup>23</sup>。例えば、志賀は日本の伝統的山岳信仰を、科学の立場から俗信にすぎないとする。

火山は最も推魁変幻に、自然の大活力を<sup>しげん</sup>示現するを以て、民人のこれを拝崇する殊に<sup>ねつし</sup>熱熾に、その富士、浅間、戸隠〔等〕……の大権現、<sup>だいごんげん</sup>明神若くは<sup>みょうじん</sup>神社なる者、皆な火山を以て神仏の<sup>せいそく</sup>棲息場の如くに仮定するが故のみ。(264)

かくして旧来の名所旧跡も、その宗教的垂直性や特権性を剥奪され、科学に支えられた均質平面へと無差別に図式化される。なるほど、志賀が日本の山岳美を称揚し登山を勧めたことは、垂直性への嗜好を予想させる。しかしそれを説く「登山の気風を興作すべし」の節には次のようにある。

〔山〕の最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、その下より平面世界の形勢は君に向ひて<sup>ちようしゅう</sup>長揖し来り、<sup>ことごと</sup>悉くこれを掌上に弄し得、君<sup>こ</sup>是に到りて人間の物にあらず、<sup>えんぜん</sup>宛然天上にあるが如く、<sup>もし</sup>若くは地球以外の惑星よりこの惑星を眺観するに似……(203)

先の比叡山の場合同様、ここでも空間的垂直性は、地上を一つの平面性（「平面世界」）へと還元する手段と化している<sup>24</sup>。

### 3 人間不在から国粹主義へ 無媒介性の構造

このように風景美を科学の枠組みで再編制し均質な平面性へ図式化したこと、旧来の名所旧跡の特権性を剥奪し「アノニマスな風景」を発見したことに、時代の文脈における『風景論』の近代性があった<sup>25</sup>。この発見を、例えば国木田独歩「忘れえぬ人々」（1898年；『武蔵野』所収）のアノニマスな人間＝風景像と重ねることも十分首肯されよう。

とはいえ柄谷のように、この均質な平面を近代的主体（「内的人間」）の相関物と捉えるのは必ずしも適切でない。志賀が先の引用で、山頂から眺める観者を「人間の物にあらず」

と形容していたことは、この点で示唆的である。『風景論』のアノニマスな平面には人間の影がない。そこには芸術の添景としての人間は現われても、風景を生み出す生々しい人間生活の過程——社会と歴史（さらには政治）——がほとんど欠けているのである<sup>26</sup>。

風景は純粋な自然現象ではなく、時間をかけて醸成される半ば社会歴史的な構築物である。しかもそれが美的・芸術的な価値表現に至るには、幾重にも文化的媒介と陶冶を要する。してみればそれらの捨象は、風景論としては欠陥と映ろう<sup>27</sup>。だがこのいわば非＝人間的な性格こそ、『風景論』の新しさを可能にしたその本質的要素である。例えば、先の比叡山や山岳信仰に関する引用が示していた通り、宗教的・前近代的歴史性の捨象と、科学的枠組みによる均質な平面性の確保とは隣接していた。そして『風景論』が科学から芸術を擬似＝因果論的に導き出すその全体構造自体、人間不在、社会・歴史の捨象を前提とするように思われる。同書全体を通じ、芸術が、科学の説明する自然的所与からあたかも自動的に帰結するような記述が頻出するが、その擬似＝因果性にはほとんど人間的・社会的・歴史的な媒介がない（だからこそ両者の接合は唐突な印象を与える）。

例えば次の特徴的な一節を見てみよう。ここで志賀は、例外的に「平和」という社会・政治的現象を正面切って論じているように見える。しかしそれは科学的に説明される自然的所与と、あまりにも無媒介的に接合される。

世に「平和」なる語あり、しかも「平和」の中の最平和は実に火口湖に依りて代表せらる。誰か料らん、この最平和の代表者は、爆声轟々、火光煽々、天日を焼き、岩石を溶かし、硫煙空を衝きて逆上し、熱灰地を捲きて吹き散じたる当初の火口ならんとは、「平和」か、「平和」か、知れ、真成の平和は物力を極端まで費了せずんば竟に得べからざることを。……君や火山力の如き氣力を揮霍し尽くして大に社会の間に周旋し、他年功成り名遂げ、竟に帰隱を計らんと欲せば、請ふ須らく廬を火山湖畔に結べ、瘴氣に冒されず、沼瓦斯の蒸発するなく、高臥閑に肉神を養ひ、最平和の間に能く天命を終へん……。 (178-89)

火山の如き社会的活躍をした人は、火口湖の脇で最も平和な晩年を過ごせるというのである。このように社会・政治現象を論じる場合ですら、科学的術語と漢語を交えた名文の背後に、唐突かつ無媒介的な因果論、ほとんど非＝人間的な環境決定論が仄見える<sup>28</sup>。

志賀におけるこの媒介項の不在は、大きな問題をはらむ。それは『風景論』全体を貫く

強い国粹主義の主張を構造的に支えているように思われるからである<sup>29</sup>。『風景論』の国粹主義は、科学的に説明される日本の自然の特性が、他国（アジアおよび欧米<sup>30</sup>）に対する日本風景美の優秀性をほとんど自動的に保証することに基づく。例えば志賀は、日本と朝鮮・中国の風景を比較している。

日本表土の五分の一実にこの岩〔火山岩〕に成るとせば、景物の警拔秀俊なる固より知るべきのみ。けだし朝鮮の如き、多くは原始紀、太古紀の地質に係り、火山岩たる少々。支那の如き、北方は一面第四紀地層に係り、平々たる水成岩延縁すること無慮四万二千方里（日本全面横の一倍七強）、いはゆる「黄土」と称し、……黄塵紛々、戸障に入り、木葉を蔽ひ、田園に累り、泉水また黄濁、殺風景の極を尽くす……。 (86-87)

このように日本風景美の優秀性を、自然科学的事実によって無媒介的・擬似＝因果論的に保証することは、『風景論』全体を通じて反復される。それは志賀が特に重視する富士山に関して典型的に見られる。

富士山に対する世界の嘆声此の如し、……然れども理学上その優絶なる所は竟に説かざるべからず、けだし理学上富士山の優絶なる所は、その麓底の平面より峰頂に到るまで、同一距離の縦坐標を以て山を幾個に横切し、一对の縦坐標の加をその差を以て除するに常に不変数の商を得、宛として対数曲線の定則を表はすにあり。この規律の斉整に加ふるに、至妙なる美術的体式を以てす、宜べなり

鍾得秀靈氣。築成東海灣。天工尽干此。不復出名山。 石野雲嶺  
の句や、真に「天工尽干此」、日本人の富士山を誇揚し、彫刻に、絵画に、詩文に、俳諧に、これを以て「名山」の宗と仰視するもの偶爾にあらず。 (96-97 ; cf. 329-30)

ここでも中立的な科学的図式が、唐突に芸術的価値と接合される。重要なことは、この富士山の優秀性が、アジアへの植民地主義的侵略の正当化に用いられることである<sup>31</sup>。志賀はいう（この部分は既に日清戦争中に書かれている）。

今や我皇の版図は台湾島に拡張し……兼て期年山東半島にして我皇の版図中に納まらんか、山東は、支那人が古往今来「岱宗」と仰望する泰山のある処、……料り知る、我

が富士山を「岱宗」となし、「千島富士」(千島チャチャノボリ)、「蝦夷富士」(胆振後方羊蹄山)、「津軽富士」(岩木山)〔以下同様〕……「薩摩富士」(開聞岳)と共に、台湾の最高峰玉山は宛如富士山に形似するを以て今や「台湾富士」と転名し、山東省の泰山は期年「山東富士」と変称し、<sup>ひと</sup>齊しく富士山の名称を冒さしめんことを。(318-19)

確認すべきは、この露骨な植民地主義的言説を支えるのも、「形似」という表面的図式にすぎず、富士山の宗教的・文化史的意義、アジアの人間生活・社会・歴史といった媒介物は捨象されることである。

ここからすれば『風景論』冒頭の有名な一節も、同様の構造をもつと解釈できよう。「江山洵美是吾郷」(13)で始まる一節である。志賀はそこで、故郷を喪失した「<sup>シユムシル</sup>占守」の「土人」(アイヌ)や「エスキモー土人」等の例を挙げ、これらの人々がどれほど過酷でも自らの故郷へと帰ったとし、次のように続ける。

脆きは人の情なり、<sup>たれ</sup>誰かわが郷の洵美をいはざらん、これ一種の観念なり。然れども日本人が日本江山の洵美をいふは、何ぞ<sup>ただ</sup>昔にそのわが郷にあるを以てならんや、実に絶対上、日本江山の洵美なるものあるを以てのみ。外邦の客、皆な日本を以て<sup>えんぜん</sup>宛然現世界における極楽土となし、<sup>ていかいお</sup>低徊措く<sup>あた</sup>能はず、<sup>おのずか</sup>自ら

花より明るく三芳野の春の<sup>あけぼの</sup>曙みわたせば

もろこし人も高麗人も大和心になりぬべし 頼山陽

の所あらしむ。<sup>おも</sup>想ふ浩々たる造化、その大工の極を日本国に<sup>あつ</sup>鍾む、これ日本風景の<sup>こんえんきゆう</sup>渾円球上に絶特なる所因……。 (13-14)

〈土人すら故郷を愛する、いわんや優秀な日本人は故郷を愛する〉というレトリックが孕む差別意識は措こう。また土人が結局劣悪な自然環境と同化され、〈美しい日本〉から排除されていることも措く。むしろ注目すべきは、この有名な冒頭の一節からして無媒介の構造が見られることである。なるほどここには人間が登場する。しかしそれは土人やエスキモーのようなほとんど自然物に等しい人間か、風景を観照する人間でしかない。能動的に社会・歴史を構築する主体的人間ではない(日本は生々しい歴史を超越した「極楽浄土」に近い)。興味深いのは、〈万人は故郷を美とする〉という全称命題の「観念」性と、〈日本人は日本を美とする〉という特称命題の「絶対」性の関係である。志賀は〈一般に全ての

故国は美しい」という観念を示す事例を列挙しながら、それを中断し（「然れども」）、唐突に〈日本という故国は特殊的に最も美しい〉（「渾円球上に絶特」）という結論を、絶対的に肯定する。その結果、この論理的には矛盾するレトリックによって、一般から特殊、観念から個別的実在が無媒介的に導出され、しかもその実在が、人間的・社会的・歴史的営為の媒介なしに一挙に普遍的・絶対的価値へと高められてしまう<sup>32</sup>。

この構造は、先に見た科学と芸術との無媒介的接合という文体的構造とそのまま重なる。そしてこの無媒介的な飛躍が、「もろこし人」「高麗人」を「大和」化するという、露骨な植民地主義的イデオロギーを正当化する（「<sup>おのずか</sup>自ら」）道具となる。つまるところ『風景論』の国粋主義は、既にその文体によって構造的に支えられているたといえよう。

## 結 皇国史観への道 上原敬二との比較

『風景論』は影響力の強い書物であり、出版後、現代まで「日本風景論の系譜」ともいふべき多くの書物を生み出した<sup>33</sup>。その中には志賀の『風景論』に批判的なものも、そこから著しく乖離するものもある。とはいえこの系譜を迎れば、志賀の影響力とその展開の可能性を示す興味深い研究となろう。

本稿では一例として、上原の『日本風景美論』（以下『美論』と略）を瞥見したい<sup>34</sup>。それは志賀の『風景論』の影響を端的に示し、しかも太平洋戦争中に書かれた書物として、その風景観は徹頭徹尾、皇国史観に貫かれている。

〔日本の風景観は〕外国に於ける自然を人より斥け、遠ざげた歴史とは雲泥の差がある。……日常何の奇もなく見過して来た郷国の自然風物はこれ即ち我々と血を分けた同胞の間柄と称しても差支えない。かく想ふとき、それ等によつて形つくられた風景、環境が無意識の間、長年月のうちに「神と共に」「君と共に」「家と共に」の思想を醗酵したことは何の不思議もない事実であつて……我が民族の宿命はここに認められる。（6）

〈自然を愛する日本人〉という常套句は措くとして、興味深いのは、「日常何の奇もなく見過ごして来た」アノニマスな風景が、皇国史観と結びついている点である。アノニマスな風景は、近代的な主体的自我ではなく、家族的共同体意識を支えている。

さらに「歴史」「長年月」「民俗の宿命」といった語が示すように、上原には『風景論』

に欠けていた、現代の風景が歴史の蓄積によって形成されるという認識がある。彼は日本の風景史全体を概観している。「我々の心理のうちには記紀時代から今日に至るまでの凡ての自然観がそのまゝに、何れかの形式を以て現に我々の心境に脈打つてゐるのを知つてゐる」(33)。この歴史意識はさらに、人間が風景を積極的に造るという意識ともつながる。後に東京農大教授ともなる上原は造園学者であり、『美論』でも風景を積極的に造形する具体的手段を縷説している。これは『風景論』から一步を踏み出すものといえよう。

とはいえそのような歴史意識は、やはり或る種の無媒介へと陥ってしまう。

著者が茲に我が国民の古代よりの自然観の変遷を述べた理由は唯単にこれを史的に叙述するのが目的ではなく、自然の恩恵を知りこれに感謝するの心構あつてこそ、その国民は榮へ、これに反し自然の恩恵を冒瀆するが如き国民は早く滅亡するといふ天の摂理を知らしめんが為である。(32)

上原にとって歴史が重要なのは、それが「血を分けた同胞の間柄」にも比すべき自然との情動的な一体化をかもし出すからでしかない<sup>35</sup>。それは人間の主体的活動を超えた「天の摂理」のもたらすもの、「環境が無意識の間、長年月のうちに醗酵した」ものにすぎない。「学んで得たものではなく、教へられて知つたものでもない。祖先代々我が純潔な血統の裡に生れながらに湛へられた自然心に根ざしてゐる心理が勃然と奮ひ立つたまでである」(9)。この種の上原の発言は、志賀の科学的説明さえ超越している。そこにあるのは、自然との無意識的・自動的な、その意味で無媒介的な一体化でしかない。

確かに『風景論』やそれを巡る当時の書評には、天皇制自体を擁護する要素はほとんど見られない。しかし無媒介的な文体構造に支えられた『風景論』の国粹主義には、上原のような皇国史観的風景観へと容易につながる素地があった。これは近代的「風景の発見」への貢献とは別の、『風景論』のテキストがもつ一つの潜在的可能性を示すものといえよう。

図版<sup>36</sup>：



図 1 寐覚の床



図 2 対馬の海岸

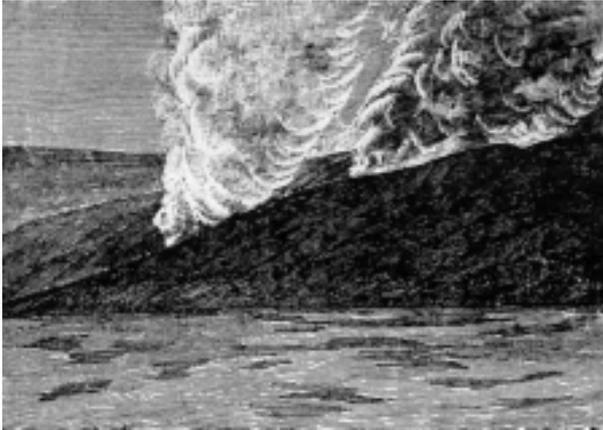


図 3 吾妻山の噴煙

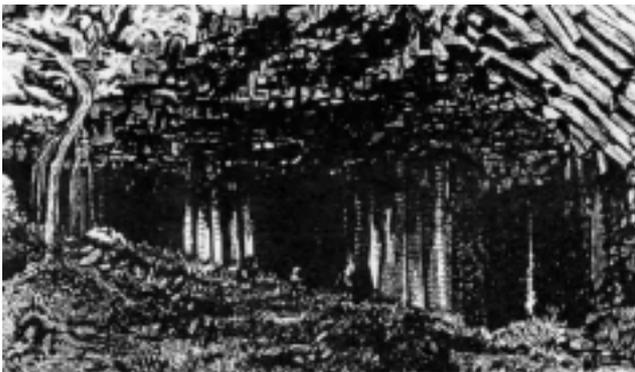


図 4 玄武堂

- 
- 1 最初期の例として、ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』（1860；中央公論新社、2003）、II：22-38。ブルクハルトはフンボルト『コスモス』（1845-47）を先駆とするが、この種の言説は十八世紀末イギリスのピクチャレスクの美学にも見られた。Shin-ichi Anzai, “Gilpin, Price, and Knight: A Critical Survey of the Aesthetics of the Picturesque,” *Aesthetics*, 5 (1992): 65-76. さらに例えば、リルケ「風景について」（1932）、『全集』8（河出書房新社、1991）；ケネス・クラーク『風景画論』（1956；岩崎芸術社、1998）；ヨアヒム・リッター「風景——近代社会における美的なものの機能をめぐって」（1963）、安彦・佐藤編『風景の哲学』（ナカニシヤ出版、2002）；エルンスト・H・ゴンブリッチ『規範と形式——ルネサンス美術研究』（1966；中央公論美術出版、1999）；オギュスタン・ベルク『日本の風景・西欧の景観——そして造景の時代』（講談社、1990）；ピエーロ・カンポレージ『風景の誕生——イタリアの美しき里』（1992；筑摩書房、1997）；佐藤康邦「風景画の現象学」、『現代思想』、20-9（1992）：92-106；柏木智雄・倉石信乃・新畑泰秀『明るい窓——風景表現の近代』（大修館書店、2003）。
- 2 典型例として、ボードレー「人と海」（1852）、『悪の華』（岩波文庫、1961）、60-61。
- 3 例えば、ジンメル「風景の哲学」（1913）、『著作集』12（白水社、1976）；越宏一『ヨーロッパ美術史講義——風景画の出現』（岩波書店、2004）；W. J. T. Mitchell, “Gombrich and

---

the Rise of Landscape,” Ann Bermingham and John Brewer (eds.), *The Consumption of Culture 1600-1800: Image, Object, Text* (London: Routledge, 1997).

4 柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社、1980): 17、21。さらに、李孝徳『表象空間の近代——明治「日本」のメディア編制』(新曜社、1996)。

5 大室幹雄『志賀重昂『日本風景論』精読』(岩波書店、2003)、特に第一・二章。

6 小山烏水「[岩波文庫初版] 解説」(1937)、志賀重昂(近藤信行校訂)『日本風景論』(岩波文庫、1995)、368-71。

7 大室前掲書、特に第五・六章。

8 黒岩健『登山の黎明——『日本風景論』の謎を追って』(ペリかん社、1979)。

9 小島烏水『アルピニストの手記』(1936; 1939; 平凡社、1996); 荒山正彦「明治期における風景の受容——「日本風景論」と山岳会」、『人文地理』、41 (6) (1989): 551-64。

10 『風景論』は現在も国粹主義的文脈で称揚される。安芸由夫「志賀重昂と『日本風景論』——国際的地理学者の国粹保存の視線」、『日本及日本人』、1634 (1999): 98-106; 渡部武『『日本風景論』の系譜——志賀重昂の繋ぐ中世と昭和』、同前、1636 (1999): 27-37。

11 特に大室幹雄前掲書。先行研究を広く渉猟した周到な研究として、森谷宇一「志賀重昂『日本風景論』を読む」、『文芸学研究』(大阪大学)、6 (2002): 1-63。

12 加藤典洋『日本風景論』(1990; 講談社、2000); 李前掲書; 内田前掲書。『風景論』の革新性について、土方定一「解説」、志賀重昂『日本風景論』(講談社、1967)、下: 178-85。

13 大室前掲書。大室は断ずる。「志賀の著書の新しさは、ただ一点、煙霞癖の煙霞や雲霧、雲烟といった古びた語を水蒸気と呼びなおした一点だけにあったのだといってさしつかえない」(51)。

14 内村は『日本風景論』と同年に『地理学考』を出版した。両者の関係について例えば、鈴木範久『内村鑑三とその時代——志賀重昂との比較』(日本基督教団出版局、1975)。

15 小島前掲解説、368。

16 以下、『日本風景論』からの引用は、前掲岩波文庫新版による。漢字を現代風に改めた箇所がある。

17 『風景論』の同型反復的特徴について、樋口忠彦「志賀重昂」、内田健三編『日本を発見する』(講談社、1986)、35-68。

18 亀井秀雄「日本近代の風景論——志賀重昂『日本風景論』の場合」、小森他編『つくられた自然』岩波講座・文学 7 (岩波書店、2003): 17-41。「地文学」の語は、後の引用にもある通り『風景論』にも現われる。

19 色川大吉「志賀重昂『日本風景論』」、エコノミスト編集部編『日本近代の名著』(毎日新聞社、1966)、71-78。

20 米地文夫「志賀重昂『日本風景論』のキマイラ的性格とその景観認識」、『岩手大学教育学部研究年報』、56 (1) (1996): 15-34。

21 李前掲書参照。多少違う視点からだが、佐藤健二『風景の生産・風景の解放——メディアのアルケオロジー』(講談社、1994)。

22 例えば、32、59、62、120、214、277、355。

23 この点でそれは、前述の内村鑑三『地人論』と対照される。大室、内田、鈴木前掲書。

24 確かに「緒論」で展開される美的範疇、「跌宕」には、西欧の「崇高」に通ずる垂直性がある(浜下昌宏「志賀重昂『日本風景論』にみる日本的崇高の可能性——「跌宕」・山岳景仰と国粹」、『文芸学研究』[大阪大学]、8 [2004]: 1-25)。しかしそこにも、例えば「満眸皆な梅、月色皎々、他に些の一物を看ず」(23)のような平面的な実例が多く含まれる。またこの「跌宕」に関する節(22-23)は、単に例の列挙にすぎず、分類のための分類の感を拭えない。その意味でも平面的図式性を特徴とするといえよう。これは志賀が繰り返す日本植物の雄渾(例えば 34-35、195)にも *mutatis mutandis* にあてはまる。

25 柄谷、加藤、李前掲書。

- 
- 26 『風景論』に社会学的視点が欠けていることは大室前掲書も指摘する。
- 27 また風景の「保存」は説かれても(321以下)、風景を作ることは論じられない。これも瑕疵と見なそう。ベルク前掲書参照。
- 28 こうした人間性の捨象は、確かに風景における或る種の美的味わいをかもし出す。例えば後に人間や風景を絵画として観ることを主題化した、漱石の『草枕』(1906)の「非人情」参照。或は加藤前掲書『日本風景論』が村上春樹や吉本ばななに見る、人間的なものからの離脱の感覚もそれに通じよう。漱石も示唆する通り、ここには恐らく風景美における「日本的なるもの」がある。Shin-ichi Anzai, “Transplantation of the Picturesque: Emma Hamilton, English Landscape, and Redeeming the Picturesque,” Dowler, Carubia, and Szczygiel (eds.), *Gender and Landscapes* (New York: Routledge), 56-74.
- 29 志賀の風景論と国粹主義を論ずる前田愛は、後の日露戦争の従軍記で、志賀が風景のみに注目し、戦争の現実を無視する傾向にあるという。前田愛「志賀重昂と日露戦争」(1973)、『幻景の明治』(朝日新聞社、1978)。
- 30 アジアと欧米の風景に対する志賀の反応には微妙な差異がある。すなわちアジアは日本より根本的に低いものとし、欧米は日本と同等(潜在的には優位)となるよう留保をつける傾きがあり、そこに脱亜入欧論、近代日本に典型的なコンプレックス、当時の中国の脅威への心理的反発を読み取れよう(例えば、22、35、42、83、174-75、180、187、190-91、209、326)。さらに、船曳建夫『「日本人論」再考』(NHK出版、2003)、57-61。
- 31 日本植民地の風景における同様の問題に関しては、関連文献も含め、倉石信乃・柏木智雄・新畑泰秀編著『失樂園——風景表現の近代1870-1945』(大修館、2004)、第五章。
- 32 この無媒介性は、先述の独歩の「忘れえぬ人々」にも見られる。そこに或る新しい内面性が見られるのは確かだが、それは主体的・歴史的な自我の内面化というより、単なる「情」による無媒介的普遍化にすぎない。『全集』、II(学習研究社、1964):120-21。
- 33 例えば、小島烏水『日本山水論』(1905)、『全集』5(大修館、1980);伊藤銀月『日本風景新論』(前川文栄閣、1910);渡辺十千郎『風景の科学』(新光社、1924);保田与重郎『風景と歴史』(1942)、『全集』16(講談社、1987);上原敬二『日本風景美論』(大日本出版、1943);勝原文夫『農の美学——日本風景論序説』(論創社、1979);加藤前掲書;切通理作・丸田祥三『日本風景論』(春秋社、2000)。
- 34 上原前掲書。同書からの引用中、漢字を現代風に改めた箇所がある。
- 35 前註32参照。
- 36 『風景論』での位置(頁数)は、図1:279、図2:310、図3:116、図4:184。